



TITLE:

滿洲遠征日誌(2)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 滿洲遠征日誌(2). 天界 1927, 7(78): 381-384

ISSUE DATE:

1927-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161145>

RIGHT:

滿洲遠征日誌 (2)

山 本 一 清

七月一日(金曜) 彗星が南へ遠ざかつて行くので、當地の觀測は今夜限りとする。晝のうち一寸市街へ買ひ物に出かけるつもりであつたけれど、朝から夕刻までひざい雨風で全く外出が出来ない。之れでは今夜又駄目かと思ひに心配したが、日没時から空は次第に晴れて、西には金星と月とが輝き始めた。それで大に元氣付き、4時半から金星高度も測つて、タイム觀測8時過ぎ、西の地平に沈み行く三日月の景色を2枚カメラに収めた。但し單なる餘興以外の何物でもない。今夜も井ンネケの流星が可なり多い豫想で、9時から約1時間天空を見張つたが、9時20分頃に3等級のものを認めた外、他は皆微光で、數も餘り多くなかつた。彗星の出るのはすつこ遅くなるので、夜半までは赤道儀で北極附近の寫眞を撮る。午前1時頃、平田氏邸の隣家の烟突の側にフオマルハウト星が見えたので、其れを頼りにして其の近くに井ンネケ彗星を捜し當て、1時8分から短時間寫眞を2枚撮つた。1時19分に終る。星が低いので、家の烟突が邪魔になつて觀測は出来ない。——止むなく之れで御しまひとし、あそこは寫眞板の現象やら赤道儀の片付けなどで忙殺される。

七月二日(土曜) 昨夜の觀測を終つたまま一睡もしないで、寫眞の現象定着乾燥をやる傍ら、赤道儀其の他の器械の片付け、居間の整理、書類や衣類の整理、大小の荷作りなどに忙殺された。7時過ぎ食事。8時西岡氏に送られて、いよいよ辭去、9時0分、奉天驛を發し歸途に就く。驛には西岡、石川、渡邊、稻葉諸氏のほかに、教專の學生數名、それに驛長も見送られた。——汽車の中では居睡り續け、午後6時安東を通過、鴨綠江を渡つて朝鮮に入る。

七月三日(日曜) 昨夜は8時から寢臺に入つたので熟睡した。今朝6時50分京城着。丹羽、大山其の他の諸氏に迎えられ、まづ驛の樓上で朝食。次いで8時からは太平通りの YMCA で講話した。日曜の朝八時といふ未

曾有の會であるのに拘らず、室は人で滿ちた。題は「宇宙を支配するもの」
9時半に講演を終り、10時京城發、急行でまつしぐらに内地へ！

七月4日(月曜) 釜山からの聯絡船中も大變好都合に、朝7時下關着。
廣津幹事其の他諸氏に迎えられ、ホテル食堂で朝食の後、8時より梅光女
學院講堂で學生及び一般人士に講演「井ンネケ彗星觀測談」。

10時下關發、午後6時50分岡山着。新聞記者に面接した後、自働車で倉
敷町の原氏宅に入る。少憩して空を見守るうち、10時過ぎから天頂が晴れ
たので水野氏と同道して天文臺へ出かけ、ドームを開け、又、經緯儀觀測
を始めやうとしたが11時過ぎから又々曇り、さきの見込みが無いらしいの
で止むなく原氏方に歸り、就床。

七月5日(火曜) 朝7時過ぎ汽車で水野氏と共に岡山行き、山陽女學校
で講演。それから水野氏宅で休憩、午後は午睡。—— 空は朝から夕刻に至
るも晴れない。晴れゝば直ぐ倉敷へ歸つて觀測と思ひつゝも、晴れないの
で、午後七時から市内の深極小學校で講演。10時、雨をついて倉敷へ自働
車をかる。

七月6日(水曜) 朝9時倉敷から岡山へ。岡山では水野氏の案内で、午
前中は市立商業校、午後は縣立工業校で講演。午後3時過ぎの汽車に水野
氏と同道して倉敷に歸り、同好會主催で、教會堂に於いて講演「井ンネケ
彗星觀測談」。

折角、倉敷へやつて來た目的に添はず、天は毎日曇り續けて、何時晴れ
るかも知れないので、之れで滞在を打切るこゝとし、荷物をまとめ、今夕6
時過ぎの汽車で倉敷出發。岡山で急行に乗り換へ、夜半京都に着いた。

これで、井ンネケ觀測の旅は終る。京都へ歸つてからも毎日空は曇り
續けのため、此のまゝ、彗星は遂に見えずに終るこゝとなつた。

此の行。京都を出てから元の京都に歸着するまで23ケ日、其のうち、奉
天に在つて觀測したのは前後18ケ日。此の中で2夜だけが全曇であつた
のであるから、元々、雨を避けた目的から言へば、奉天へ出掛けたこゝは
可なり成功であつたと言つて好からう。殊に後に聞いた所では札幌の中村
氏も10日間に3ケ日曇られたといふこゝであるから、奉天の天氣は誇るに

足るものであつた。しかし、自分が奉天滞在中、親しく経験した所では、今年は「奉天に雨期が幾週間か早く來た」ミ土地の測候所で發表した程で、可なりひざい曇りにも會つた。之れは日本内地が一帶に「空梅雨」であつたミ云はれたのミ對照して、彼此共に天候不順の世界的傾向の現はれである。

ミにかく、自分は奉天で總計51枚の天體寫眞を撮影し、其の他幾多の流星やタイム等の觀測をしたが、若し天氣が平年の通りであつたならば、觀測は恐らく其の2倍の收獲を擧げ得たであらうミ思はれる。

「**井ンネケ**」と面會した人の話

去る8月3日、自分は伊勢の津に來たのを幸ひ、學生時代に御厄介になつた村岡範爲博士を御訪ねした。博士ミは實に十幾年振りの對面なので、いろ々々ミ古い話が盡きなかつたが、ふミ博士が言はれるのに：——

「僕はかの近頃の彗星でやかましい**井ンネケ**ミいふ天文學者に會つたミがありますよ。たしか其れは1880年頃でした。僕がドイツ國のストラスブルグ大學に勉學してゐた時、**井ンネケ**ミいふ人が居て、ごく暫くの間、其の人から天文學の講義を聽いたミがあります。もう其の時は**井ンネケ**氏はよほどの老人でしたが、1881年の頃、同氏の子息が死んだミがあつたため、**井ンネケ**氏は非常に落膽して、遂に其れが原因で退職しました。」

此の話を聞いて、自分は非常に深い興味を覺えるミ共に、其の數日後、京都へ歸るミ共に、學者の列傳を読んで見たら、「**井ンネケ**氏は平素の勤勉のため、1865年頃から神經衰弱の氣味あり、健康保養のためカールスルーへ市に移つたが、1872年、獨佛戰爭の後、新しく占領されたストラスブルグ大學の天文台長ミして招かれた。しかるに、1882年、自ら設計した此の大學天文台が完成した後、又々病氣が昂進したので退職した」ミ書いてあつた。して見るミ、此の**井ンネケ**氏がストラスブルグ大學教授時代に吾が村岡博士が天文の講義を聽かれたのである。（山本）

日本で一番早くキンネケ彗星を見た人々



去る5月31日、山本博士の上京を機とし、本會東京支部でキンネケ彗星の観測會が催された。會員や非會員の集まるもの約五十名、十五センチの中村鏡や其の他の望遠鏡を庭に並べて、龍座を運行中の彗星の姿を競つて見た。「キンネケ来る」といふ聲は今年初から高かつたけれど一般大衆が見たのは之れが最初であつた。